『消防団にできる恩返し』

今治市立大三島中学校 3年 田村 芽衣

私の住んでいる大三島は、人口も少なく、お年よりの方が多い、高齢化の町である。だから、お互いが助け合いながら生活をしている。それを支えてくれている一つが、消防団だ。私の父も、消防団の一員である。

父は、市役所で働きながら、消防団でも活動している。今治市にいる約二千人の消防団員のうちの一人だ。消防団は、いろいろな訓練を通して、地域で災害が起こった時のために備えてくれている。例えば、火災が起こった時などには、携帯に出動メールが送信されるようになっていて、このような対策をして、すべての住民が安心・安全に生活できるように努力してくれているのだ。では、父が入っている消防団での仕事を紹介しよう。

放水訓練や一一九訓練、年末夜警などがある。

年末夜警では、冬の寒い夜に拍子木をたたきながら、地域を見回ってくれている。私たちは、拍子木の高い澄んだ音と「火の用心」という声を聴くことで、防火・防災意識を高めることができている。消防団は、寒さに負けず、地域の住民一人一人のために全力を尽くしてくれているのだ。自分の仕事を朝・昼にこなし、夜には消防団として活動している消防団員。私たちは、消防団がいてくれているからこそ、安心・安全で豊かな毎日を送れていることを忘れてはならない。

消防団が活動しているのは、夜だけではない。いつ起こるかわからない火事の際にも、消防団は活躍する。放送やメールで連絡をとり合い、消防署の応援に行っている。一軒や一人を助けるために、地域全体が団結して尊い命を守ろうとしてくれているのだ。これは、地域を愛しているからこそ、できていることだと思う。

私たちは、消防団に支えられながら生活をしている。だから、こんなに楽しい毎日を送れているのだ。

自分の仕事と消防団の仕事を両立している消防団は、地域の誇り。災害が起こっている時も、起こっていない時も郷土愛護の精神を忘れずに、いつも地域の先頭に立って、一人一人の命を大切に思ってくれている。私たちは、助けられてばかりではいけない。自分で自分の命を守る努力をしなくては。火事を防ぐために火の取り扱いに気をつけたり、地震に備えて非常持ち出し袋を用意したりすることで、自分で「もしも」を常に意識して生活するようにしたいです。それが、防火・防災につながっていくと思います。

火事は、「意識」を持つことで数は減っていくと思うし、地震は「備え」をすることで被害は少なくなるはずです。

自分たちで、自分の命を守るためにできることを考える。それを、行動にうつす。これが、消防団の人たちにできる恩返しだと思う。